り、父子あり、兄弟あり、長幼あるなり。各其分を盡して、公の義成る。故に公の爲にするものは、秩序を守りて其分を盡すべし。

六二　公の爲にするものは約を重んず

公の爲にする秩序あり。秩序を立つるの公式は約(成文不文)にあり。故に約を破るものは、公を侵害するものなり。故に約を破るものは、公に對して犯罪するものなり。法律は國家の約なり。倫常は人類の約なり。故に法律を破るものは國家の罪人なり。倫常を亂るものは人類の罪人なり。犯罪の源は公を忘るゝにあり、公を知らざるにあり。

六三　公共の範圍に大小あり

人類全體に通ずるは一種の公共なり。一國家に通ずる公共は又一種なり。一組織に通ずる公共は又一種なり。一社會に通ずる公共は又一種なり。一團體に通ずる公共は又一種なり。一地方に通ずる公共は又一種なり。一家に通ずる公共は又一種なり。其他公共に多種あり、多類あり。故に公共の範圍は、大小頗る不同なり。然れども、皆其範圍に通ずるが故に、公共たるを失はず。

六四　公共の各範圍に約束あり

公共の各範圍、一々其約束(成文的或は不文的)あり。故に其約束を犯すものは、皆公共の德を害するものにして、犯罪者たるなり。成法上のみならず、不成法上に於ても、嚴然之が制裁を加へざるべからず。

六五　國家主義と個人主義との調和

秩序的公共主義は、國家主義と個人主義とを調和するものなり。其公の爲にするは、國家の爲にするなり。而して其間に秩序(上下貴賤等)を認持するは、個人の爲にすることを包括するなり。

六六　公共の爲にするものは我を別立せず

公共の内には、固より我あり。然れども其我は公共の一分子たるに過ぎず。故に之を別立するは、未だ公共の眞意に達せざるものなり。公共を區分して、我と他人とに別立するものは、多數の他人を一方に置き、單獨の我を一方に置き、其平衡を持たしめんとするものにして、自己に不當の價値を附加するものなり。是れ全然たる私曲にあらずと雖ども、大に之に類するものなり。若し夫れ眞正の公共心は、我を以て公共の内に投入し去り、公共以外に我を別認せざるものなり。己を忘れたるものたらざる可からず。之を献身的態度と云ふ。故に眞正の公共心は、献身的精神たるなり。是に於てか、眞正の利他心を見るべし。眞正の利他心は、自の價値を揚擧して、自に對する他を利すと云ふにあらず。自を忘じ去りて、唯公あることを認め、之れを利するの心を云ふなり。

六七　公共心を修養せんには無限を觀ずるを要す

公共心は修養を要す。其修養の最上方法は、絶對無限者の性能を觀ずるにあり。絶對無限の觀想、心裡に瀰漫するに從ひ、公共心の實用漸く隆盛なるを得べし。

六八　公共心は無我心たるを觀ずべし

主我心は私心なり。公共心は私心と背反するものなり。己を忘れたる心は無我心たること勿論なり。

既に無我心なり、我慢心、我見心、我愛心ならざること勿論なり。

而も尙ほ我心を免かれざるは、止觀の足らざるが爲なり。勉めて修養に從事すべし。

六九　公共心は無畏心たるを觀ずべし

怖畏の情は、我の他に侵害せらるゝことを怖畏するなり。既に己を忘れて無我の心に住するものは、怖畏の情を滅殺し得べきなり。而も尙怖畏を免かれざるあるは、無我心の確立せざるにあるを反省すべし。此の如きは、只修養によりて之を確立せしむるを要す。修養とは止觀是なり。

七〇　公共心は不動心たるを觀ずべし

迷惑動搖は、有限怖畏の心情より生ずるものなり。既に無限不畏心に住するものは、迷惑動搖を免がるべきなり。而も尙之を免るゝ能はざるは、修養の足らざるが故なり、反覆此止觀に從事すべし。

七一　百般の妄情は我心に根す

貪欲と云ひ、瞋恚と云ひ、詐欺と云ひ、憍慢と云ひ、嫉妬と云ひ、猜忌と云ふ等、百般無數の妄情は、畢竟我見、我所見に基因するものなり。既に無我心に住するものは、此等の妄情を脫却すべきなり。而も尙然る能はざるは、修養の足らざるが故なり。勉めて反省思惟以て道心を鍛錬すべきなり。

七二　報恩の經營は義務を守るにあり

絕對無限は我を救濟するの大慈悲者なり。其慈恩に報ずるの心は、愈〻大悲の救濟を顯揚せんとするの情操たるべし。而して報恩の經營は、情操の發現する所にして、自ら絕對無限を顯揚するの義務を勵守するを期すべし。故に義務を守るの心なきは、報恩の情を缺くものなり。故に道德に勇まざるは宗敎を得ざるが爲なり。（宗敎とは大慈悲者に對する信仰なればなり。）

七三　絶對無限と人格

絶對無限は萬德を包括す。故に人格にして道心の修練に大用あるものとせば、吾人は絶對無限に擬するに、完全無缺の人格を以てすべきなり。或は絶對無限を最上理想に止むるを欲せば、決して之れを妨げず。然れども理想にして、吾人を慰安し、吾人を策勵する以上は、之を人格的に觀ずるに於て、毫も故障あるべからず。唯人格とは、吾人有限の成立を以て、之を無限の成立に擬するものたるを知るべきのみ。

七四　應無所住而生其心

是れ公共心を以て活動するものゝ心地なり。住する所なきは、無念想、無執着の謂なり。己を忘れて無我なるものゝ心は、何所と定めて住する所なきなり。而も何事をも思はず、何事をも爲さずと云ふにあらず。活潑々地に社會に行動す、其思念の盛なるや勿論なり。故に而生其心と云ふなり。

七五　無念無想を誤るなかれ

無念無想なれと云ふは、執着的、偏固的、私我的の念想を絶せよと云ふことなり、決して枯木死灰となれと云ふことにあらず。妄念邪想を離れて、眞正なる念想に從へと云ふものなり。邪智巧慧を去りて、天眞爛熳の妙用を爲せと云ふものなり。工夫を盡し、盡して、工夫の絶したる心狀を云ふものなり。深く修養を加ふるにあらずば達し難き所なり。

七六　道德と宗教

（八月十八日）

道德は止惡作善に外ならざるにあらずや、而して之が制裁は何所にありや。反善向惡が罪惡なりとの信念確立を要するにあらずや。

善惡の標準は外的なりや、內的なりやは今措いて問はず。

法律尙制裁を要す、道德豈に制裁を要せざらんや。

結果の苦樂之が制裁たり得るや、所謂惡を作して、却て樂を得るものを如何。善を爲して却つて苦を得たるものを如何。

若し良心の苦樂之が制裁たるべしと云はゞ、惡を作すに良心の苦を感ぜざるもの、善を爲すに良心の樂を感ぜざるもの、所謂良心の死却せるものを如何にするや。

結果は苦樂が制裁たる能はざるは無論なり。而して良心の苦樂なるものは、抑發育開展を要するものなり。其育成が正しく道德的修養なるものなり。換言すれば良心育成の爲めに制裁が必要なるなり。良心ありて制裁を成し得るにあらざるなり。(良心——而後——制裁)にあらず。(制裁——而後——良心)たるべきなり。

制裁は如何にして確立し得べきや。是れ道德上の根本問題なり。

法律上の制裁は形而下なり、實現なり、其すら、尙完全を期し難し。缺席裁判の、遂に其罪人を逸する場合あり。犯罪ありて發見せられざる場合あり。

道德的制裁の成立、決して人爲人力の創造し得るものにあらざるなり。是れ二世に亘り(耶蘇敎の如き)三世に亘り(佛敎の如き)て因果應報の說ある所以ならずや。

而して因果應報は常に絕對的力用を具せざるべからず。完全的力用を具せざる可らず。至上的力用を具せざる可らず。

吾人は果して絕對的完全的至上的なるものを識知し得るや。

相對有限の吾人に、絕對無限の識知なかる可からざるなり。而して識知は必ず相對有限ならざるべからずと謂ふべきや。

嗚呼道德は終に其根據を獲得する能はざる乎。

夫れ然り豈夫れ然らんや。何ぞ智力的直覺なしと云ふや、何ぞ宗敎的信念なしと云ふや。

若し夫れ智力的直覺を立し、宗敎的信念を立せば、何ぞ絕對無限の得難きを歎ずるを要せんや。

而して宗敎的世界は、絕對無限の制裁を以て、罪惡を制止するものなり。

絕對無限の制裁と、罪惡の觀念とは、並存せざる可からざるなり。絕對無限の制裁なき所には、眞の罪惡の觀念成立する能はず。罪惡の觀念存立

せざる所には、絶對無限の制裁あるなきなり。

而して罪惡の存立は信念たらざる能はず。

絶對無限の制裁も畢竟亦信念たらざるなきなり。

或は制裁は因果應報の完全なるなりと云ひ、或は制裁は因果を支配する所の神佛の存在なりと云ひ、或は制裁は絶對眞理其物の妙用なりと云ふを得べし。而も此等制裁の現實は、其吾人の信念の確立せる所になりて存するのみ。

故に吾人道德行爲の制裁は畢竟吾人の信念が、自ら活動するものに外ならず。

自の信念が、自らの妄想を制裁するもの、是れ道德的の裁制なり。

而して完全なる道德は完全なる(不動の)信念を要す。完全なる(不動の)信念は、絶對無限に對する信念たらざるべからず。

絶對無限に對する信念は、是れ正に宗教の精髄なり。

故に曰く、道德の成立は宗教を待たざるべからざるなりと。

(八月十九日)

根本的に之を論せんか。

善惡なるものありや、なきや。

之なしと云ふは、平等門なり。是れ固より眞理なり。

然れども此門より云はゞ、邪正も、是非も、曲直もなき筈なり。否、眞理(對非眞理)其物もなき筈なり。絶對平等無差別あるのみ。此の如き見地は是れ正に宗教の態度なり。

然るに平等門に對して、亦差別門あり。

善惡、邪正、是非、曲直は此門內の談なり。此門內には亦眞理と非眞理との相對あるなり。其非眞理、之を妄想妄念と云ひ、或は煩惱業障と云ふ。之に對して眞智あり、正念あり、菩提あり、涅槃あるなり。

常識の門は此差別門なり。故に善惡あり、德不德あるなり。是れ卽ち道義の源泉なり。

道義 {實行——去惡就善
　　{制裁——因果應報

- 實行
  - 無上命令的
  - 本具心念的
- 制裁
  - 結果の苦樂(利害の計算)
  - 法律的
  - 輿論的
  - 絶對的
    - 眞理
    - 神佛
    - 法則
    - 信念

(一)利害の計算は到底完備なる能はず。

(二)法律の拘束は逸脱あり。

(三)輿論の賞罰は漠然にして、亦常に當を得るにあらず。

(四)絶對的制裁こそ、眞の制裁たるを得るものなれども、此には眞理、神佛、法則、等の別あり。而も此等は皆吾人の之に對する信念(慧見)によりて初めて活動し得るのみ。故に其實は自己の信念が、自己の行爲を制裁するもの

なり。是れ眞の克己復禮にして所謂獨立自在の活作用なり。是れ道義の根本なり。故に曰く、道義の根本は、宗教的信念の確立を要すと。

而も更に絶對、何の爲に此の如き制裁を爲すや。抑制裁の成立する眞意は如何と問へば、畢竟絶對が止惡作善を意念するが爲と云はざる可からざるなり。法律の制裁は法律が非法を防がんと意念すればなり。輿論の制裁は輿論が非道を防がんと意念すればなり。今絶對の制裁、何ぞ此に異なるあらんや。然らば止惡作善は絶對の意念なり。而して吾人に無上命令を與ふるものは、絶對の意志なり。吾人に本具心念あるは絶對の意志なり。吾人の道義的成立は全く絶對の本性に基くものなり。吾人が止惡作善は絶對の本性に順ずるものなり。云々。

七七　無上命令(本具心念)

無上命令は、絶對無限が必然的必須的に、相對有限に命令するものなり。本

具心念は絶對無限が必然的必須的に、相對有限に賦與せる心念なり。(或は之を良心と云ふも、亦同じ。)是れ蓋し相對有限が絶對無限の境界に冥通し得る所以の根基なり。故に此命令心念に順すると違するとに於て、絶對無限的の快苦を感ずるなり。是れ本心の喜悅と、本心の呵責とは、共に絶對無限的なる所以なり。

七八　昇沈

所謂我なるものは、强ち有限的のものにあらず。一たび無限を認信せば、我は無限有限の一致體なり(佛凡一體)。而して其行爲が無限的なれば、其境界は無限的なり。其行爲が有限的なるときは、其境界は有限的なり。故に我は、或は無限界に昇登し、或は有限界に沈落して、轉變止むなきなり。然れども修養は終に我をして永く無限界に安住せしむるに至るなり。

七九　希望

將來に對しては唯希望を持せよ。希望は現在に歡樂を生ずべし。

八〇　苦痛(恐怖)

將來に苦痛を想像して(之を杞憂と云ふ)恐怖するは妄念なり、煩惱なり、決して之を爲す勿れ。

八一　苦樂

苦樂は現在にあり。現在の苦は之を避けよ。現在の樂は之を進めよ。

八二　死生を均くす

死生を均しくするの人は、現在に苦を感せざるべし。其未だ苦を脫せざるは、其未だ死生を均くし了らざるが爲なり。

八三　一定の惡あることなし

一定の惡あることなし。先づ受動的のものに就て之を見よ。人の我を侵害するは、或は我の業報なりと感ぜば、必然の結果と諦め得べし。而して此の如き業報は、我をして善に進ましむるの方便なりと觀ぜば、侵害は卽ち我病に對する良藥なりと知らるべし。(艱難辛苦は人を玉にするの材料なり。)次に我が人に對して爲すこと、人或は之を惡と感ずるあらん。而も我に於ては是れ彼を道に到らしむるの方便たるべし。是れ彼は之を惡とするも、(彼覺らざるが故なり)我に於ては、彼に對する好意なり、善巧方便なり。

故に吾人は各自に、惡は之を避け、善は之に進むの一道に心掛くべし。此の心確立せば、我は惡を脫して、善の世界に逍遙するものなり。此の極や既に對すべき惡なし、故に之を善と名くべからず。(善惡は相對なればなり)。故に是非善惡なりし。之を平等界と云ふ。

八四　平等界は無功用以上なり

一念の惡なきは純善の境界なり。是れ無善惡の境界なり。此境界は其行爲に於て善の修練を積み、進みて所謂任運無功用に、善を行ふを得る以上の境界なり。故に其人自らも此境界に到りては、最早善惡の念想を脫却せるものなり。知らず識らず帝の則に契ふの境界なり。自然にして法に合する境界なり。行爲の妙境は皆是なり。(運筆の妙、劒法の妙等以て參すべし。)之に達せざるは差別の執著あるが故なり。故に妙境に進むの方法は、執著を打破するにあり。(執著を打破するとは、畢竟善く修練するに過ぎざるなり。)

意識的動作(コンシアス、アクション)は、進みて無意識的動作(アンコンシアス、アクション)となり、

意念的動作(アーチフヒシアル、アクション)は、進みて自然的動作(スポンテーニアス、アクション)となる。

有意的動作(ヴォランタリー、アクション)は、進みて無意的動作(インヴォランタリー、アクション)となり、

感覺的動作(センセーショナル、アクション)は、進みて反對的動作(レフレックス、アクション)となる。

八五　宗教は信念の確立を主とす

宗教は信念の確立を主要とす。

智は論理的なり、故に相對的なり。前提斷案の相對。

情は感覺的なり、故に相對的なり。能覺所覺。

意は被動的なり、故に相對的なり。能動所動。

唯信念は絶對的なり。

信念は前提を建設し得べし。

信念は能覺所覺を創造し得べし。

信念は能動所動を建造し得べし。

信念其物は他に建造さるゝ能はじ。

八六　學理は信念に根據す　（八月二十七日）

論理學は學理の原則を究定する學なり。而して其基範は三大則にあらずや。均同の方則。背反の方則。不容間位の方則。是れ何によりて其根基を得とするや。或は之を自明の理なりと云ふべきか、而も自明とは信念上に自明なるにあらずや。

其他萬有一揆の天律、原因結果の天則、等其究竟根基皆悉く先天的或は後天的の信念にあらずや。

數學は萬有學の原則とする所なり。而して其所謂自明の原理（アキシオム）、措定の原理（ポスチユレート）、は何に根據するものなりや。

物理、化學、鑛物の諸學、其源頭に措設する所の空間、時間、勢力、運動、物質、分量、等の諸範疇は、何を以て最後の根基とするものなりや。

哲學は萬學の基礎を究定すと云ふ、而も究理は常に相對界に落在す。相對界より一躍して、絶對界に登到する其雲梯は是れ何ものぞや。直覺と云ひ接觸と云ふも、信念の明瞭なるに何れぞや。

實驗と云ひ、觀察と云ひ、經驗と云ふ、是れ吾人が若干の信念を確立せる上のことならずや。而も實驗觀察に根據せざる信念は正確ならずと云ふや、豈に自家撞着の至大なるものにあらずや。

之を要するに、吾人が有する幾多の官能作用は、皆悉く相對的を脱する能はず。唯信や能く絶對的の天地に翺翔して、無礙自在なるを得べきのみ。

八七　我現在の信念

我は我あることを信ず。（統一的原理或は心王）
我は外物あるを信ず。
我は我と外物に各其作用（變化）あるを信ず。
我は我と外物との間に接觸互働の可能を信ず。
我は外物の作用に規律あるを信ず。
我は我作用に規律あるを信ず。
我は我に絶對的性能あるを信ず。
我は我成立の絶對的（無限的）にして亦相對的（有限的）なるを信ず。
我は矛盾の一致あるを信ず。
我は善惡の成立に疑あり。（意的）
我は邪正の成立に疑あり。（智的）
我は美醜の成立に疑あり。（情的）

八七　我の信界

我は若干の信念を有し、之に基きて推理を建設し、其斷案として、實際に達す。是れ我が意識的世界なり。之を攪亂するものは無意識的世界なり。
我は我意識的世界の外に、無意識的世界あるを認定す。
然れども此無意識的世界は、今は我管轄外なりと雖も、終には我管轄内に包容し得べきものなりと信ず。
無意識世界が、我意識世界を擾亂する限りは、我は之を對治せんとを希望す。
此希望に對しては、意識世界は眞理界にして、無意識世界は妄想界なり。

智と意とは眞理界に關する作用にして、情は妄想界に關する作用なり。

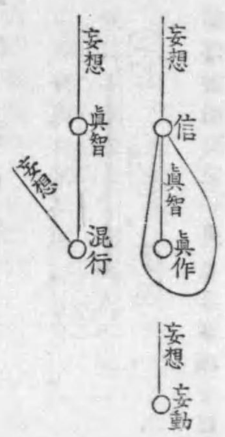
信は眞妄泯絶の境界に關する作用なり。

信に基かざる智は妄想なり。

信に基ける智は眞智なり。

妄想に促さるゝ實行は妄動なり。

眞智に起さるゝ實行は眞作なり。



吾人は妄想を對治せざる可からず。之を爲すの道は信界を純淨ならしむるにあり。乃ち基本たる信念を明白にし、其より流出する所の論理を齊整するにあり。〔是れ矛盾の原理が世界を洗淨(ピュリファイ)するの準繩たる所以なり。〕

故に道德界宗敎界は、全く信に基き、智に依り、情を治め、意に發する者たる也。

八八　精神界と物質界　(八月三十日)

精神と物質とは究竟は不一不二のものなるべし。然れども吾人は現在に於ては之を區別しつゝあり。是れ恰も無限と有限とを區別しつゝあると同一範なり。

然るに吾人の無限的なることは、最も切に精神的範圍に明なり。

吾人が無限を觀想し、無限界を成立し得るは、全く理想的なり。而して理想は現實を惹起するの指導者なり。

今吾人が有限不自由の境界より、進んで到達せんとする所の無限自在の境界は、全く理想に過ぎざるなり。

此理想を現實ならしむるは如何せば可なりや。

曰く、精神界をして物質界を克伏せしむるにあり。

克伏とは強て物質界を排斥することにあらず。物質界を研究して、精神界の需用に服從(serve)せしむるにあり。(外物に誘惑せられずして之を使用するにあり)

此進歩の極や、

天地萬物皆我有
一切衆生皆我子　の理想界

と云ふの態度に到着すべし。

是れ一方には學理の進歩によりて、吾人が自然界を支配し進むと、(水力氣力等を利用すると云ふは此一部分なり)一方には道德的交際によりて博愛相濟の道に進むと、(親密なる交友の間には彼物は我自由に之を受用し、我物は彼自由に之を受用するを妨げざるが如きは吾人の實驗にあらずや)にあり。而して其之に勇進し得る根據は、蓋し

吾人は其實、彼我同體の絶對無限たるが故にあり。(是れ現在にありては一理想なり。)

吾人は飽迄此信念を確立して、以て生々たる活動に從事せざる可らざる也。

佛敎に於て我法の二執を破斥する所以は、吾人が彼我同體の絶對無限たることを覺らず(之を不覺妄念と云ふ)して

先づ惡差別的有限の我を執して、永く他人と隔別し、外物と隔別するの妄想、

(卽ち

他人と外物とは、其實、我と同體一味なることを覺らずして、却て他人外物の爲に苦悶せしめらるゝの迷倒を斷ぜしむるにあり。

之を要するに、

理想界——文明(學術技藝 / 道德交際)の發達——宗敎(精神的克復物質的)

他人の身體や、他人の財産は、固より他人の所有に屬するものなり。然れども、我若し其人に對して充分の道德的交際を爲し、天下國家の爲になるべき事業に從ふことを談せば、其人必ず其身と財とを、以て之を助くべし。是我が他人の身體と財産とを我用に供するに非ずや。他人より我を利用することも亦此の如くなるべし。而して吾人が相互に其身體財産を利用するを得ば、我も

法界の主となり、彼も法界の主となりて、其活動は同時に亦同處にして、毫も相衝突違乖する所なきなり。之を名けて圓融無礙の境界と云ふなり。

此の如き圓融無礙の境界は、吾人の現在にありては、全く理想的なり。然れども、吾人は此の理想を實現せざるべからず。而して其之を實現し得るは現社會の未來に在るべく、亦吾人の個人的生活の未來に在るべし。其何れに在るに關せず、吾人は現在に於て之に向進するの事に着手せざる可からず。之を名づけて實行と云ふ。實行は吾人眼前の要務なり。而して實行の端緒は理想の確信にあり。確信の成立する所は精神界にあり。是れ精神的修養が實行の基本なる所以なり。故に吾人の要務は、彼の理想的萬有一體の原理卽ち絕對無限の存在を確信し、實際に我他彼此阻隔の迷妄を拂掃するの道義的實行に勇進せざる可からざるなり。唯此に最も注意すべきは、吾人の境界は決して頑牢固定のものにあらずして、吾人の心界と共に發展するもの(隨其心淨則佛土淨とは其理想なり)にして、吾人が現社會に又未來界に高妙なる境界を受有し得るは、其心界の高妙なる程度に相應するとこれなり。(今日文明人の世界と野蠻人の世界とは其實決して一樣ならず。一は多樂界にして、一は多苦界なり。一は比較的自在の境界にして、一は比較的不自在の境界なり。而して其苦樂自由の程度は、全く文明人の精神が大に發展して外物を利用し、交際を擴張せるが爲なり。之より推して求むれば、妙樂大自在の境界を發展するの道、亦大に開物成務の功を積み、道義發揚の事を務むるの外なきこと瞭然たり。)

八九　絕對的考察

唯物論。物質とは何ぞや、元素とは何ぞや。

器械的、無生的、無覺的、無念的、無想的のものたるべし。

無は有を生ずること能はざるなり。

故に物質的存在は、畢竟無念無想の世界に、無念無想の運動を爲すに過ぎざるべし。

是れ果して今日の實際なりや、是れ果して究竟の境界なるべきや。

然れども無念無想の境界は、決して全然の非眞理にあらず、佛敎禪宗の指示する所に就て其眞理を知るべし。

引證……

九〇　世界觀

吾人が世界を觀察考究せんとするに、劈頭二種の異說に突會す。

一は、我等の知識は經驗によりて、制限せらる、故に絕對的に之を觀知する能はずと云ひ、

一は、我等の思想は其自身に絕對的性能を有するが故に、絕對的に世界を觀知することを得と云ふ。

今(第一)を名づけて相對論と云ひ、(第二)を名づけて絕對論と云ふべし。

世界觀 (相對論——經驗論 / 絕對論——實在論)

經驗論は自ら二種に分る。一は經驗以外に假定或は知見を許さゞるものと其反對と是なり。(第一)は畢竟經驗其ものを絕對と爲すものにして、相對論中には矛盾的なりと雖も、其實此論者は經驗論者中の極端にして、當初主客兩觀の實在を假定して、其上に經驗なるものを構說したるも、其論理中經驗以外に假定を許すの不可なるを知り、終に經驗以外一物をも許さざる極端に走りて、自家撞着を爲せるものなり。(第二)は經驗の基礎として、主客兩觀の必要を忘れざるも、如何せん、經驗以外には到底確實なる斷言を爲す能はざるが故に、只何か經驗外の實物存することをのみ主張して、其如何なるものなりやは不可知なりとするに至れるなり。不可知なるものを、存在すと云ふは明瞭なる大矛盾なり。

之を要するに、經驗論は畢竟自家矛盾を免るゝこと能はざるものなり。

經驗論 (經驗相對論(唯感覺論) / 經驗絕對論(可知界 / 不可知界))

實在論は思想の性、能く絕對を觀知し得べしと爲すものなり。而して玆に思想と云ふは一種の心性作用と云ふ底の意義にして、此內部には多種の論

者あり。今之を總括せば三要者を得。(第一者)は論理的に絶對を觀知し得べしと爲すもの、(第二者)は頓悟的に絶對を觀知し得べしと爲すもの、(第三者)は信念的に絶對を觀知し得べしと爲すものなり。此三者中、第一者は吾人にありて尤も正確なるが如しと雖も、其實後二者の如く堅牢なる能はざるなり。其故如何となれば、論理は畢竟命題(卽ち判斷)の連鎖によらざる可からざるが故に、最上の命題は決して論理的證明の保成し得る所にあらず。故に遂に論理以外の方法を要求せざる能はず。而して其方法は假定、悟斷、信念の外ある能はざるなり。中に就て、假定は以て論理の基本とするに足らず。故に悟斷又は信念を以て論理の基本と爲さざる可からざるなり。

絶對論〈論理的／頓悟的／信念的〉

夫れ此の如くして吾人は絶對的に世界の成立を觀知し得るとせば、吾人は先づ茲に絶對と相對との關係を明にせざるべからず。而して其論系凡そ三種あり左の如し。

(一)創造論
(二)顯現論
(三)轉化論(進化論)

創造論は絶對的存在が世界萬有を創造すと云ふものにして、所謂神造物の論なり。然るに此論の中に多神が多物を創造すとするものと、二神(通常善惡二神)が二界を創造すとするものと、獨一眞神が一切萬有を創造すと云ふものとあり。

創造論〈多元的——多神／二元的——善惡二神／一元的——獨一眞神〉

顯現論は絶對的本體が萬多の現象を呈露すと云ふものにして、通常一元論なりと雖も、若し其本體を不可知的なりとするものにありては、多元二元の論もなきにあらず。例せば、主觀には主觀の本體あり、客觀には客觀の本體あり

とするが如きは、二元的顯現論と云はざる可らず。多元的の論も亦推想し得べきなり。然れども、若し此の如き多元二元の本體を可知的なりとせば、皆自家撞着を免かるゝ能はざるなり。何んとなれば、可知的區域内に絶對の多數ある能はざればなり。

顯現論
- 二元的
  - 多元的
  - 不可知的
- 一元的

轉化論(進化あれば退化あり得べし、今双方を合して命名して轉化論と云ふ)は絶對的存在が始終轉化しつゝあるが、世界の成立なりとするものなり。而して其内多元的(極微、分子、單子の論の如き)二元的(眞如無明の互働論の如き)一元的(唯物、唯心の論の如き)ありと雖も、其尤も注意を要するものは無論一元的轉化論なり。

轉化論
- 多元的
- 二元的
- 一元的
  - 唯物論
  - 唯心論

信仰及修養 終

校訂者

多田鼎
佐々木月樵
曉鳥敏

大正二年六月六日印
大正二年六月廿九日發

刷行

信仰及修養奥付
定價二圓郵税十二錢

編者　浩々洞
右代表者　東京市小石川區白山御殿町一〇七　曉鳥敏
發行者　東京市巣鴨町二丁目三十五　原子廣宣
印刷者　東京市本所區番場町四　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四　凸版印刷株式會社分工場

著作權所有

發行所　東京巣鴨町二ノ三五　振替東京三一二二番　無我山房

324
350

終